

保育内容「環境」における自然との触れ合いの必要性

—学生の自然とかかわる体験を通して—

香 崎 智郁代

Necessity of contact with nature in the “environment” of childcare: Through students’ experiences with nature

KOUZAKI Chikayo

1. 問題意識と目的

保育・幼児教育において自然との関わりの重要性については、これまでも多く指摘されてきたところである。例えば、幼児期の自然体験はその後の子どもの行動や発達に影響があることが示されている。前田ら¹は森や自然を活用した野外保育を実施することにより、子どもの身体感覚や運動能力が高まり、脳の働きも向上する可能性について言及している。また、山本ら²は、幼児期に自然体験活動を行っている子どもの保護者は、子どもが運動能力や体力が高く、望ましい生活習慣が身に付いていると評価する傾向にあると述べている。また、子どもの自然体験や生活体験と生活習慣の関連性を調べた調査によると、「自然体験や生活体験、お手伝いを多く行っている子供は、自律性・積極性・協調性といった自立的行動習慣が身につけている傾向がある」ことが指摘されている³。しかし、一方で子どもが遊ぶ場所や体験する場所の減少、生活環境の変化から子どもの自然体験や生活体験の機会が減少してきていることが危惧されている⁴。

そのようななか、2018年改訂の幼稚園教育要領では、第2章「ねらい及び内容」環境 2内容 (1)「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く」ことが示されている^{5 6}。また、同要領の第2章「3内容の取扱い」においては、留意事項として (2)「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われること

を踏まえ、幼児が自然との関わりを深めることができるよう工夫すること」と記されており、乳幼児が自然に触れ合うことの重要性や保育者がその機会を設定していくことの必要性が改めて記載されている。さらには、2018年改訂の際に新たに加筆された第1章総則 第2「幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」、いわゆる10の姿のなかで、(7) 自然との関わり・生命尊重として、「自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることをもちながら関わるようになる」ことが記されている。すなわち、幼児の身近な自然との実体験を通じた関わりの中で動植物を大切にすることが育まれていくことが記されている。以上のように考えると、保育・幼児教育の場において自然と関わる機会を提供していくことがこれまで以上に重要になってきていることがうかがえる。

保育・幼児教育の場で子どもが自然と関わる機会を提供していくのは保育者であることから、保育者の自然に対する関わり方がその内容に大きくかわっていることは想像に難くない。越中・杉村⁷は先行研究から保育者が「自然とかかわる保育」を意識している場合には、ポジティブな影響が子どもたちにあることについて述べたうえで、保育者の有する自然観が極めて重要であることを指摘している。さら

に、大橋⁸は子どもが自然と関わりを深めていくための保育者の役割として、①人的環境としての保育者、②コーディネーターとしての保育者、③子ども同士のかかわりを促す保育者の3つがあるとまとめており、なかでも②コーディネーターとしての保育者として、「子どもには、「こんな体験をしてもらいたい」「こんな感動をいただいてももらえたら・・・」と思うことこそが子どもと自然環境との出会いを創る」ことであり、その出会いを創ることが保育者の役割であると述べている。また、園田⁹は近年の子どもを取り巻く環境の変化から意識的に自然環境との関わりを増やしていく必要があることを指摘したうえで、保育者として自然への興味や関心をもっておくことが重要であると述べている。すなわち、保育者自身が自然への興味・関心を持ち、意識的に関わっていくことが求められているのである。

以上のような保育者にとって必要とされる自然への興味や関心、自然観は保育者になってすぐに醸成されるものではない。例えば、梶田¹⁰は保育者の保育観はそれまでの個人の体験や育ち方によって影響を受けることを保育者へのインタビューを通して明らかにしている。そのなかで、それぞれの保育観が、保育者養成の時期、保育現場に就職してから時期、結婚や出産というライフイベントの経験、子どもとの関わり、といった4つの観点から形成されていくことを見出しており、保育者養成時期における取組も必要であることがわかる。

保育者養成校において学生と自然との関わりを促す授業方法として、様々な形態がとられている。例えば、田川¹¹は虫の観察と採集活動を行う授業を通して、学生の虫に対する嫌悪感の緩和と保育での活用意欲の向上に及ぼす効果を検証している。また永井¹²は授業のなかでミニトマトの栽培を行い、栽培を通した学生の意識変化について検討を行っている。

そこで本稿では、保育者養成校の学生対象授業において実践した、ネイチャーゲーム¹³の一つである「フィールドビンゴ」の取組を取り上げ、その活動のなかで自然への意識がどのように変化してきたかを学生の振り返りシートから検討し、今後の指導の在り方の一助とすることを目的とする。

2. 方法

本稿では、フィールドビンゴの演習を通して学生の自然に対する興味や関心などの意識変化がどのように変化したのかを学生の振り返りから検討することを目的とした。フィールドビンゴは、「見る・聞く・さわる・かぐなどさまざまな感覚を使って自然を楽しむビンゴゲーム」¹⁴であり、ビンゴカードに描かれた内容について、五感をつかって探し出していくという遊びである。幼稚園や保育所等の保育現場においても子どもたちが活動として実施することもある。

(1) 対 象

保育内容「環境」の授業を受講している学生31名

(2) 手続き

2021年4月の授業1コマを使用して実施した。まず、事前準備として、学生各自が16マス（4×4）のフィールドビンゴを作成した。当初は対面授業で実施をする予定であったが、Covid19感染拡大により、オンデマンド授業へと変更となったことから自宅周囲の自然環境に触れることを目的として実施した。ビンゴを作成する際の注意点として、自分の家の周囲にあると思われる項目をいれること、五感を使った項目をいれること、文字だけでなく、絵もビンゴのなかに入れることで他学生が見た際にわかりやすいように工夫すること等を伝えた。またフィールドビンゴを実施した後、保育現場で子どもたちと一緒に実施する場合に注意すべき点も記載するようにした。学生が準備したフィールドビンゴの一例を図1に示す。

準備をしたフィールドビンゴを使用し、学生各自の自宅周辺で実施をした。使用時間はおよそ1時間程度とし、その後実施してみての気づき、感想、保育現場で実施した場合の注意点としてどのようなことが考えられるかについて振り返り、まとめる時間をとった。

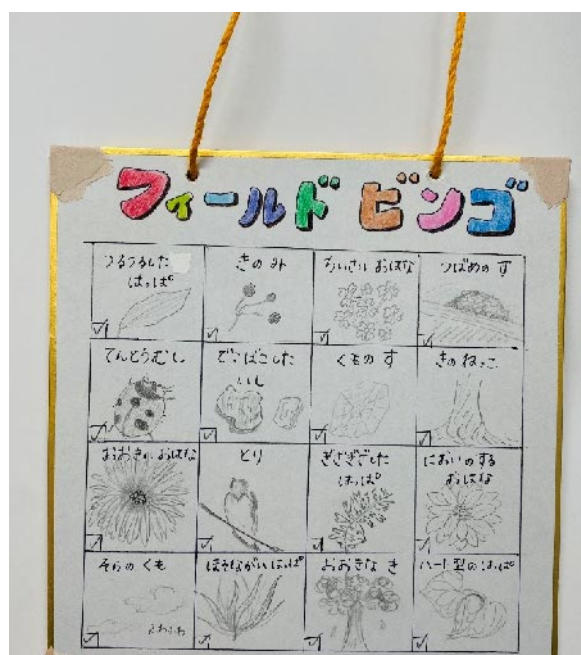


図 1. 作成したフィールドビンゴの一例

(3) 分析方法

- ① 得られた振り返りをテキストマイニングの手法を用いて分析した。テキストマイニングとは、大量の文字データである文章を単語ごとに分解・解析し、有用な情報を取り出す分析手法とされる。
- ② 実践上での注意点についての記載された項目はカテゴリー分けを行った。

3. 結果

フィールドビンゴを実施してみての振り返りの特徴を、ユーザーローカル社のテキストマイニングツール¹⁵を使って分析を行った。

ワードクラウド ワードクラウドとは、出現頻度（スコア）の高い単語ほど大きく表示される図を指す。振り返りのなかでスコアが高かった単語のスコアを示す（括弧内は出現頻度/スコア）。「子ども（22/8.36）」、「発見（19/4.37）」、「普段（11/2.59）」、「目線（9/6.10）」、「楽しい（4/0.06）」、「新しい（3/0.05）」、「よい（3/0.02）」であった。ワードクラウドを図2に示す。



図2. 振り返りに関するワードクラウド

共起分析 共起分析とは、同じ文章中に同時に出現されやすい言葉を分析する手法である。出現される頻度が高い言葉がより大きい円で表示され、さらに共起の程度が強いほど、互いを結ぶ線が太く示される。結果から、「子ども－発見－普段－新た－自然－多く－におい－周り－意識」、「発見－思う－できる－感じる－見つける－探す」等の共起関係が見られた。共起分析の結果を図3に示す。

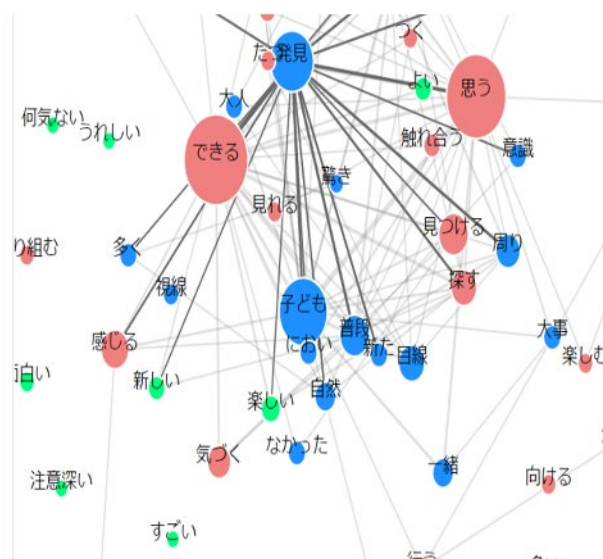


図3. 振り返りに関する共起ネットワーク

さらに、実践上での注意点について学生が記載した内容についてカテゴリー化されたものを表1に示す。

表 1. フィールドビンゴを実施する際の注意点

カテゴリー名 () 内は項目数	記載された項目の一例
交通ルール・マナー (20)	道路に飛び出さないようにする (2) 車や自転車に気を付ける (2) 遠くいかない (2) 交通ルールやマナーを守る 道路や人などの身の回りの危険に注意する 周りを確認する 前を向いて歩く
自然の中の危険 (10)	蜂などに触らない 虫刺されに気を付ける 蜂や毛虫には触らない
水分・休憩時間の確保 (9)	細目に休憩の時間を持つ 水分を細目にとる 帽子を着用し水分補給を行う
自然を大事にする (6)	植物にも命があるため、摘まない、踏まない 自然を傷つけない 自然は大切にすること
活動を楽しむ (6)	たくさんの発見をする 楽しく探す
友達との時間 (5)	友達と仲良く探す (2) 約束を守って仲良く探す
その他 (5)	時間を守る (2) 動きやすい服装でする

ここでは、車や自転車等に気を付けるための交通マナーが一番多く挙げられた。また、自然のなかでの活動ということから、蛇やその他の動物、虫、植物だけがをえる危険性もあること、水分補給や休憩を適宜とる、といった子どもが安全に活動ができるための注意点がその次に続いた。その他、活動の目的である自然との触れ合いから生まれるであろう自然を大事にする気持ちや活動を楽しんでほしいという気持ち、友達と仲良くしてほしいといったカテゴリーが見いだされた。

4. 考察

本稿では、フィールドビンゴ実践の振り返りから学生と自然との関わりについての意識の変化を明らかにし、今後の授業展開を検討する一助とすることを目的とした。ここでは結果をもとに2点考察したい。まず1点目は、フィールドビンゴを通しての自然との関わりについてである。本稿では、保育者を

目指す学生が自然と関わる機会をつくった。そのなかで、テキストマイニングの分析結果にも見られたように、「子ども」「触れ合う」「発見」「見つける」などの言葉が頻出した。これはフィールドビンゴを通して、自然を注意深く観察することによって、改めて身の回りの自然に気づき、新しい発見をしたということの表れであろうと考える。また、それらの発見を改めてすることによって学生自身が楽しいと感じたこともうかがえる。

さらに、共起分析の結果では、「子ども－発見－普段－新た－自然－多く－におい－周り－意識」、「発見－思う－できる－感じる－見つける－探す」といった内容が示された。この点においても、フィールドビンゴを通して、改めて普段みている周囲の自然を意識してみたり、におったりすることによって、新しい発見や気づきがあったことを示したものであろう。以上のように、フィールドビンゴを準備し、そこに描かれている項目を見つけようと周囲を注意深く見たり、聞いたり、におったり、触ったりという五感を通して自然と関わることによって学生が改めて自然に対して興味や関心をもつきっかけとなったといえる。また、保育者養成におけるネイチャーゲームの可能性について検討をしている後藤は、フィールドビンゴが規定のカードを使うことで学生が工夫していくことの限界について指摘している¹⁶。しかし、本稿で実施したように、学生自らがフィールドビンゴを作成して実施をすることで、学生の工夫を促すことにもつながったのではないかと考える。

2点目に、フィールドビンゴを通しての自然との触れ合う際の注意点についての保育者の役割への気づきである。本稿では、授業のなかで学生が実際に子どもと同じようにフィールドビンゴを通して自然と触れ合う機会を設けた。実際に学生が自然に触れ合うことにより、その注意点として、交通ルールを守ること、自然の中での危険に注意すること、子どもが水分補給したり休憩したりしながら活動すること等、子どもの安心・安全に注意をする視点が見いだされた。つまり、子どもと一緒に活動をした場合は、どのような点に注意をすべきか予想し、交通ルールや保育者として子どもにどう関わるべきか、その役割を予測できる機会となったことがわかる。さらに、子どもに自然を大事にしてほしい、活動を楽しんでほしい、友達と仲良く時間を過ごしてほしい、といった気づきも見いだされたことから、保育

者としての願いや希望も体験できたのではないかと考えられる。前出の後藤は、「言葉よりも動作を中心とした内容の方がより具体的に保育方法や配慮事項を考案しやすい傾向がある」¹⁷ことを指摘しており、今回のフィールドビンゴのように実際に身体、五感を使った活動をすることで、学生が保育者として子どもと一緒に活動することをより具体的に想定して保育者の役割に気づくことができたことを示唆している。これらのことから、今後も学生が実際の体験を通した学びができるような取組の導入が求められる。

5. まとめ

本稿では、保育者を希望する学生がフィールドビンゴを実践することで、自然への興味・関心がどのように変化するのかについて明らかにし、今後の授業展開の一助することを目的とした。結論として、実施をすることで、より学生が身近な自然に対して、興味・関心を持っていく様子が見いだされた。また、同時に体験を通して学ぶことで、より実際に保育現場において実施した場合を推測した気づきがあったことが見いだされた。今回の研究では、学生が個人で実施をしてきたが、グループ活動をすることにより、さらに自然への気づきが深まり、興味・関心を引き出すことにもつながることが予想される。実施形態については今後の課題である。

引用文献

- 1 前田泰弘・小笠原明子・加藤孝士「野外保育が幼児の発達に与える効果に関する研究の展望と課題ー移動運動と姿勢制御の発達に与える効果を中心にー」『こども学研究』、2、p47、2020年。
- 2 山本裕之・平野吉直・内田幸一「幼児期に豊富な自然体験活動をした児童に関する研究」『国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』、5、pp79-80、2005年。
- 3 独立行政法人 国立青少年教育振興機構『青少年の体験活動等に関する意識調査（平成28年度調査）』（https://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/130/）2021年9月閲覧
- 4 内閣府ホームページ「第3章 生育環境 第2節 体験活動」『平成27年版 子供・若者白書』

- （https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h27honpen/pdf/b1_03_02.pdf）2021年9月閲覧。
- 5 文部科学省ホームページ『幼稚園教育要領』、2018年3月。
- 6 保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領においても同様の記載がある。
- 7 越中康治・杉村伸一郎「保育者の自然観はいかにして形成されるか？（1）ー「森の幼稚園の保育者が語る現在の自然観ー」『幼年教育研究年報』、30、p49、2008年。
- 8 大橋英子「保育内容「環境」の指導のあり方ー授業内容アンケートをもとに自然とかかわる保育ー」『滋賀文教短期大学紀要』、20、p12、2018年。
- 9 園田雪恵「保育内容「環境」と小学校教育課程とのつながりー子どもの自然との関わりと生命の尊重ー」『夙川学院短期大学研究紀要』、44、p33、2017年。
- 10 梶田正巳・杉村伸一郎・後藤宗里・吉田直子・桐山雅子「保育観の形成過程に関する事例研究」『名古屋大学教育学部紀要教育心理学科』、37、
- 11 田川一希「虫の採集・観察を行う授業は、大学生の虫に対する嫌悪感を緩和するか？」『教育科学論集』、7、pp20-31、2020年。
- 12 永井毅「自然体験を取り入れた保育内容「環境」の授業改善：ミニトマトの栽培を体験した学生の意識変化」『湊川短期大学紀要』、57、pp19-25、2021年。
- 13 ネイチャーゲームは、1979年に米国のナチュラリスト、ジョセフ・コーネル氏によって発表された著書「Sharing Nature with Children」にあるシェアリング・ネイチャーの考え方に基づいたものである。多種多様な活動を活かし、自然に関する知識や年齢に関係なく楽しむことができます。日本シェアリング・ネイチャー協会ホームページによると、自然の中だけでなく、町中の公園や、学校の校庭でも手軽にできるのがネイチャーゲームの魅力とされている。
- 14 公益社団法人 日本シェアリング・ネイチャー協会ホームページ
https://www.naturegame.or.jp/known/sn_life/000718.html 2021年9月閲覧
- 15 ユーザーローカル社テキストマイニングツール
<http://textmining.userlocal.jp/>
- 16 後藤範子「保育者養成におけるネイチャーゲームの可能性について」『国際学院埼玉短期大学研究紀要』、25、p20、2004年。
- 17 注16)、p21。

参考文献

後藤範子「保育者養成におけるネイチャーゲームの可能性について（2）：サウンドマップに見られる自然に対する感性和保育方法への応用」『国際学院埼玉短期大学研究紀要』、26、2005年、pp27-35。

後藤範子「保育者養成におけるネイチャーゲームの可能性について (3) : 第4段階「感動をわかちあう」活動に関する考察」『国際学院埼玉短期大学研究紀要』、27、2006年、pp21-26。

後藤範子「保育者養成におけるネイチャーゲームの可能性について (4)」『国際学院大学埼玉短期大学研究紀要』、28、2007年、pp33-38。

渡邊和成、吉津晶子「保育士養成課程学生の世代間交流実習における自然観察指導に関する学び ネイチャーゲーム：フィールドビンゴの項目および実習記録の分析をも

とに」『日本世代間交流学会誌』、3(1)、2013年、pp77-86。

岡嶋一郎「Mentimeterを用いた遠隔授業に対する大学生の感想のテキストマイニング」『西九州大学子ども学部紀要』、12、2021年、pp41-46。

伊藤孝子「領域「環境」の変遷に関する一考察」『滋賀文教短期大学紀要』、23、2021年、pp11-24。

石原卓子「保育内容の指導法に関する一考察～自然とかかわる保育環境を通して～」『富山短期大学紀要』、43(2)、2008年、pp1-10。